

夏石番矢句集『真空律』に見る二・二六事件

Kaoru MIWA

三輪 薫

桔梗の花の中よりくもの糸 高野 素十

高野素十のこの句は強い、と俳人・長谷川權は言う。曰く、「この句は昭和十年という日本が戦時色を強めていた時代の作だが、その時代背景から完全に切れていて、日本に昔からあり将来もあるはずの、桔梗が咲き蜘蛛が糸を張る自然を「場」にしている。」「この句の強さは、句の「場」から自然以外の不純物をすべて削り落としているところにある。」と言う。

時代と無縁のこの句は、強いのだろうか。

× × × ×

この句が詠まれた昭和十年の八月、陸軍軍務局長永田鉄山少将刺殺という事件が発生した。

陸軍省軍務局長室を訪れた相沢三郎中佐は、いきなり抜刀して、逃れようとする永田軍務局長の背部に第一刀を加え、次いで隣室の扉まで逃れるのを追って背後から突き刺し、同局長が倒れるやその右こめかみに刃をあてて、武士の作法どおり止めの一刀を突き刺し、その傷により同局長を失血死させた事件である。

相沢中佐は尊王の念が厚く、「桜会」(橋本欣五郎大佐主催の現状革新を目的とする結社)にも所属しており、暗殺の動機は「政党、財界の腐敗に結びついて私利私欲をはかる軍部を肅正する」という点にあった。しかし、事件の詳細は報道されず、世人は陸軍上層部の惨劇を声を潜めて噂し合った。

サクラチ オホ チ ス シンブンシ 夏石番矢
桜散ル大イニ血ヲ吸フ新聞紙
コカン エソギク サ ダイテツジノウシ 々
股間二蝦夷菊ガ咲ク大鉄人ノ脳死

(『真空律』、思潮社、一九八六年、以下同)

今に残る犯行の現場写真を見ると、絨毯の花模様か血に塗れた足跡か判別できない床に、陽光を浴びて仰向けに倒れている背広姿が永田鉄山局長であろう。

相沢中佐は仙台市の生まれ、青森歩兵第五聯隊大隊長の経歴があって心酔する将校も多かった。剣道四段の巨漢でしかも使用した軍刀は河内守藤原国継、江戸中期の実戦向きの豪刀であったから、斬撃は凄惨をきわめた。

相沢中佐は軍法会議で死刑を宣告され、死刑は翌年七月執行された。これが二・二六事件の幕開けである。

× × × ×

二・二六事件の裁判は、「昭和の暗黒裁判」と呼ばれるにふさわしく、多くの不条

理と疑惑をたたえていて、真実は今も不明である。しかし、東北地方に棲む私達にとって忘れてならぬことは、この事件が東北地方農民の困窮に起因して発生したという事実である。

被告の誰かの陳述に、「度重なる冷害・凶作により東北・北海道農民の飢餓悲惨は言ふに忍びざるものがあり、蕚を食い蕨を食って糊口をしのぎ、貧に耐へかねて娘を売るものもある。その家族を故郷に残して出征する兵士は後髪を引かれる思いであろう。この状態を一日放置するときは一日軍は危い。農を以て基とする我国農村の窮乏は実に国家存亡の危機である。」とあり、首謀者らの死刑判決の理由書も、「(被告等は)軍隊教育ニ従事シ兵ノ身上ヲ通シ農山漁村ノ窮乏、小商工業者等ノ疲弊を知得シテ深く是等ニ同情シ、就中一死報國共ニ国防ノ第一線ニ立ツヘキ兵ノ身上ニ後顧ノ憂多シト為シ云々」と叛乱の動機を認定している。

彼らの攻撃目標は、天皇と一般庶民の間に介在する元老、重臣、政党、財閥に向けられた。これらグループこそ「君臣一体」の国家理念を歪曲し、日本を窮乏に陥れている元凶である、と考えたからである。

トウキヤワ イカ ハナ ユキ ハナ
東 京ニ怒レル華ハ雪ノ華
ヒツセイ イツキイツキヒヤクシヤウイツキ
畢生ノ一氣一氣百 姓一揆

夏石番矢

々

いまでこそ二・二六事件は、一部青年将校による暴発というイメージが作り出されているが、実は、番矢が詠むように「雪ノ華」つまり東北出身精兵の怨嗟を代弁した「百姓一揆」の性格が濃厚だった。

その証拠に、事件の後始末にあたって陸軍は、参加した下士官・兵を処罰しないとの極秘方針をとったが、取り調べの結果、意外にも、叛乱に自発的に協力した下士官・兵が多数判明して、実に九十三名も起訴せざるを得なくなっている。

下士官・兵は上官の命令にただ服従したのではなかった。彼ら自身の命懸けの百姓一揆でもあったのである。

× ×

× ×

事件発生は、昭和十一年二月二十六日午前五時。

かねて政治の腐敗と疲弊した国家の現状を憂い、昭和維新の断行を叫んでいた青年将校二十四名に率いられた麻布の歩兵第一聯隊と第三聯隊、それに近衛歩兵第三聯隊、野戦重砲兵第七聯隊の一部を加えた下士官・兵総勢千四百余名が武装蜂起し、内閣総理大臣官邸その他の私官邸を襲撃した。

内大臣齊藤実、大蔵大臣高橋是清、教育総監渡辺錠太郎を殺害し、内閣総理大臣岡田啓介と誤認して松尾秘書官を射殺。侍従長鈴木貫太郎重傷。襲撃を受けて逃走できたのは重臣牧野伸顕のみであった。

襲撃を終えた各部隊は、三宅坂一帯を占拠して陸軍省、参謀本部、陸相官邸への交通を遮断し、帝国陸軍の中枢を蹶起部隊の手に収めた。

中心となった将校は野中四郎大尉、香田清貞大尉、村中孝次元大尉、磯部浅一元一等主計、安藤輝三大尉、栗原安秀中尉、中橋基明中尉および対馬勝雄中尉。

対馬はこの事件ただ一人の青森県人であった。

彼らは川島義之陸相に面会を強要して、蹶起趣意書を読み上げ、昭和維新の実現を要求した。

陸軍は軍事参議官会議を召集して事態の收拾をあれこれ論議したが、「統帥派」「皇道派」の対立で紛糾し、結局、蹶起部隊に同情的な「陸軍大臣告示」なるものが作成された。

これが蹶起部隊に伝達されたのは二十六日午後三時過ぎであったが、その中に、

- 「一、決起ノ趣旨ニ就テ八天聴ニ達セラレアリ
- 二、諸子ノ行動八国体顕現ノ至情ニ基クモノト認ム」

とあり、蹶起部隊の将兵は歡呼の声をあげた。早朝からの行動は認知され、このまま一気に昭和維新が成るかに見えたのである。

赤坂の陸軍省では、軍事課長村上啓作大佐が「昭和維新」の大詔渙発も間近いと判断して早々と勅語の草案を起草した。

ニンチ 認知セリ日ノ中	チュウカク 核ノ	ウツ 鬱ノ	ハナ 華	夏石番矢	
アカ 赤キ	シヤメン 斜面ニ	ミテイ 未定	カ 勅語ヲ	書キ下口ス	々
ニレ 楡ノ	ラクヤウ 落陽	キョウサン 共産主義	セタク ノ	背丈ヲ述ベヨ	々

ほぼ同時に、第一師団管下に「治安維持」の警備令が発令され、蹶起将兵らをその警備部隊に編入。早朝からの行動は治安出動だったとしてとり繕われた。

「治安出動」は共産主義革命を鎮圧することだが、当時すでに壊滅状態にあった共産党を一体どうせよというのか、青年将校らは戸惑ったという。

この時点で、蹶起部隊は決して叛乱軍ではなかった。

× × × ×

事態が急転回した端緒は、昭和天皇の怒りである。

多くの重臣等が襲撃され殺傷される事態に、「朕ノ首ヲ真綿デ絞メルヨウナモノ」のお言葉が伝えられる程の激怒。事件の当初から天皇は感情的であった。

二十七日、本庄侍従武官長は天皇に対し蹶起の趣旨を述べ、同情的な意見を奏上したが、天皇は少しも動かされる気配なく、のみならず、さきに指示した叛乱軍鎮圧が進まぬのを焦慮して「朕自ラ近衛師団ヲ率ヒ鎮圧ニ当ラン」とまでの強硬な態度を示された。

レイテキ 靈的ナル	ハヒイロ 灰色ノ	クツワ 轡ヲ	タレ 誰ニ	キン 禁ゼムヤ	夏石番矢	
アマ 天ツ	ミノラ 御空モ	セウキョク 消	シソウ 極思想ガ	カ 欠ケテ	モル	々

それが陸軍上層部に伝わり、事件の收拾を急転回させた。これ以後、「昭和維新」の夢はもろくも崩れ去り、局面は叛乱軍討伐へと向かうのである。

鎮圧のため動員した兵力は二万四千。戦車、装甲車を配置して叛乱軍を包囲する戦闘態勢をとった。一方、東京湾に遊弋する海軍艦艇の探照燈は夜空を巡り、戒厳令下の首都は異様な雰囲気にも包まれた。

シンコク 神国ノ	ヨソラ 夜空ニ	マハ 二回ル	ウマ 馬ノ	クビ 首	夏石番矢
-------------	------------	-----------	----------	---------	------

二月二十八日、悪化する事態を目前にして、蹶起将校らは万事休すと判断した。下士官・兵は原隊に復帰させ、将校は自刃して罪を謝すと衆議一決し、自決の際は

せめて勅使の御差遣を仰ぎたい旨を最後に懇望した。しかし、本庄侍従武官長の日記によれば、陛下は非常な御不興で「自殺スルナラバ勝手ニ為スベクコノ如キモノニ勅使ナド以テノ外ナリ」と仰せられ、とりつくしまも無かったという。

かくて叛乱は鎮圧されたが、怒りの天皇は軍法会議にまでも容喙し、「相沢中佐ノ裁判ノ如ク優柔ノ態度ハ却テ累ヲ多クス、此度ノ軍法会議ノ裁判長、判士ニハ、強キ将校ヲ任スルヲ要ス」と仰せられ、結局、弁護も被告発言も許さぬ秘密裁判により、実に十八名が死刑宣告を受けるのである。

ソモソモカミ サカナ セキシ ボタンユキ
抑抑神ノ肴八赤子 牡丹雪 夏石番矢
テブクロ ヒ ナ テリ セイサン
手袋ヲ日ヘ投ゲ塵ヲ生産ス 々

死刑・安藤大尉の遺書。「国体ヲ護ラントシテ逆徒ノ名、万斛ノ恨ミ涙モ涸レヌ、アア天ハ 鬼人安藤輝三」もちろん「天」は天皇を指している。

死刑・磯部元一等主計の遺書。「陛下、我々同志ほど国を思ひ陛下の事を思ふ者は日本国中どこを探しても決してありません。何という御失政でしょう。こんなことをたびたびなさいますと、日本国民は、陛下を御恨み申す様になりますぞ。」

天皇に対して恨みごとを言いつつも敬慕の情を失わない青年将校らと、冷徹な昭和天皇の心の隔たり。その絶望を夏石番矢は「階段モ無キ斜塔」に例えている。

ココウ カイダン ナ シヤタフ
股肱カナ階段モ無キコノ斜塔 夏石番矢
エンシフ ラ ニオクホン アシ クウハク
演習終ラズニ億本ノ足ノ空白 々

死刑は昭和十一年七月十二日執行された。代々木練兵場の一隅に土壇場を設け、角材で作った五本の十字架を深く埋め、その前に五人ずつ座らせ、両腕を水平に上げて横木に縛り、顔には目隠しの紙を垂れて眼光をさえぎり、小銃は一人につき二挺を銃架に固定し、距離十メートル。軍事演習と称し交通を規制したうえ機関銃の発射音に紛れて五人ずつ銃殺した。一発目は眉間に照準を定め二発目を心臓に撃つ。銃声は安藤大尉二発、栗原中尉二発、中橋中尉三発。対馬中尉は一発であった。

直前に五人は「天皇陛下万歳」を三唱したが、一人だけはつづけて「秩父宮殿下万歳！」と叫んだ。絞り出すような声であった。

本籍青森市・対馬勝雄中尉の遺書。「天皇—最高神—天与ノ最高使命—誠—絶対唯一、ソレハ事実ダ。コレヲ奉ズルハ臣下天来ノ使命デ全生命デアル」

対馬勝雄の実家は久須志神社の近くにあって、私の生家の近所、百メートルも離れていなかった。勝雄は秀麗な美男子で、子供好き、私の兄などは非常に可愛がられたものだという。記憶に残るその家は、浪館通りに面したしもた家で、いつも雨戸を閉め、人の気配も無かった。

× × × ×

母は農家に生まれ、文字もろくに読めなかった。

その母が生前に声を潜めて語ったことだが、「あの兵隊達は生きている」と言う。兵隊とは対馬勝雄のことである。死を許されて満州で暮らしている、と言うのだ。現実には、勝雄は処刑されていた。

しかし、米を作る百姓が米を食べない時代を生きた母は、一時は百姓のために泣

いてくれた兵隊達の、酷らしい死は、認めたくなかったに違いない。

青森市の西部低山地を流れる入内川は、青森平野でたくさんの水路に分れ、尻無し川となって地下に消える。その扇状地の末端、久須志神社の前に泉が湧き、小さな池があった。

ある朝、池に一人の乞食が浮かんでいた。「唾・繁造」と墨書した木札を首に掛け、古い将校マントを着るこの小男は、短気で、子供たちを怖がらせたものだ。

前夜、三半規管に障害をもつ彼は、背丈ほどの小さな池に転落した途端に、上下・左右の識別を失い、怒れば怒るほど水面に顔を出せなくなったのであろう。

繁造の泉から細い小川が流れ出ていた。グレン・グールドの震えるような水音をたて、対馬勝雄の家の前を通り過ぎ、「さよなら」と言い、やがて市井の汚濁に溶けこんで消えていた。

× ×

× ×

桔梗の花の中よりくもの糸

あの時代と無縁のこの句は、本当に強いのだろうか。

注、本稿は俳誌「まほろば」(平成十三年発行)所載文に加筆訂正したものである。

参考文献 吾妻栄編『日本政治裁判史録』第一出版社
河野司『天皇と二・二六事件国庫』河出書房新社
松本清張『二・二六事件(資料編)』文芸春秋社
香椎浩平『香椎戒嚴司令官秘録』永田書房